

H25 シカ年度 知床岬地区におけるエゾシカ捕獲事業案

1. エゾシカ個体群の現状（知床岬地区）

平成24シカ年度は仕切柵を使用して32頭捕獲した。これは捕獲前の2月20日に実施した航空センサスカウント結果56頭の57.1%にあたり、表1のとおり、順調に残存個体数を減らし、当初目標であった密度5頭/km²以下を達成したと考えられる。

ただし、自然増や流入により再び生息個体数が増加する可能性があり、また5頭/km²が植生の回復にとって適正な密度かどうかは未だ不明である。

表 2-4-1. 航空センサスカウント数とセンサス後の捕獲数など

	H19シカ年度	H20シカ年度	H21シカ年度	H22シカ年度	H23シカ年度	H24シカ年度
カウント数	447	399	374	246	265	56
センサス後捕獲数	99	72	158	57	216	32
-	348	327	216	189	49	24
(-)×1.2	418	392	259	227	59	29

2. 平成25シカ年度 捕獲事業内容案（知床岬地区）

当面は生息密度5頭/km²以下を維持することを目標とする。他所からの流入や自然増による生息密度の変化を把握し、コスト面を含めた必要最小限の個体数調整のあり方を検討することが必要。

今期は、人数や回数を最小限とし、仕切柵を活用した効率的な捕獲手法の確立を目指す。現時点での目標は今年2月のカウント数56頭から捕獲数32を引いた24頭以上を目安とし、航空センサス実施後目標を補正する。

以下、AとBの2パターンを提案する。捕獲強度、コストは共にA > B。

2-1. Aパターン：流水期へり捕獲 + 流水期後船捕獲 + 流水期後回収1回

期間： 2月中旬～3月上旬、3月中下旬～4月に各1回。日帰りでの捕獲。

人員規模： 15人程度の中規模隊

実施方法： 仕切り柵を使った追い込み

死体回収： 捕獲後1回、10名程度で回収作業を行う。

特記事項 捕獲圧大だが、コストも大。但し、流水の影響を受けないため、確実に実施可能。

捕獲前に航空センサスが実施できる。

2-2. Bパターン：流氷期後2回船捕獲 + 捕獲後回収1回

期間： 3月中下旬～4月に2回(流氷明けが遅い場合3月実施は不可能の場合もあり得る)。日帰りでの捕獲。

人員規模： 15人程度の中規模隊

実施方法： 仕切り柵を使った追い込み

死体回収： 捕獲後1回10名程度で回収作業を行う。

特記事項 流氷の状況によっては捕獲時期が遅れ、捕獲効率が低下する。捕獲が1回になる恐れあり。捕獲前に航空センサスが実施可能。

2-3. 知床岬海岸段丘 厳冬期航空センサス

期間： 1～2月

実施方法： セスナ機またはヘリコプターで知床岬上空を低空・低速で複数回旋回飛行し、海岸段丘上のシカ群を連続撮影。写真から頭数、性別等を判断する。

特記事項： ヘリコプターを用いて調査した場合でも飛行高度300m以上ならば、シカカウントへの悪影響は少ないことがH24シカ年度の調査で判明。今年度もヘリコプターを利用すれば、他の密度操作実験実施地区のヘリカウント調査も同時期に実施可能。

表 2-4-2 . 平成 25 シカ年度の知床岬地区における仕切り柵を用いたエゾシカ捕獲事業（案）

		8～9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	4月	5月
		仕切り柵 補修等			時化の激しい期間		流水期	猛禽繁殖期		
実施手法	モニタリング					航空カウント1回 ヘリ?				
	Aパターン 流水期ヘリ捕獲(15人程度) +流水期後中規模捕獲(15人程度) +流水期後回収1回 いずれも日帰り。					ヘリ捕獲 日帰り 捕獲1回	海明け後 日帰り船 捕獲1回	死体回収約10人		捕獲強度 コスト
	Bパターン 流水期後2回 中～大規模捕獲(15～20人程度) +捕獲後回収1回 いずれも日帰り。						海明け後 日帰り船 捕獲2回	死体回収約10人	流水の状況によっては2回実施が困難な場合もあり得る	